



2025年度
近畿 ESD コンソーシアム
成果発表会・実践交流会

開催日 2026年1月11日(日) 9:50~17:10

近畿ESDコンソーシアム、奈良教育大学ESD・SDGsセンター



ごあいさつ



2025年度の「近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会」を開催できますこと、心より嬉しく思います。ここに集うすべての皆様、そして会を支えてくださる皆様のご尽力に対し、主催者を代表して厚く御礼申し上げます。

今回は、西田拓大白浜町教育委員会教育長をお迎えし、「ウェルビーイングな社会に向けた白浜町の挑戦！」と題したご講演をいただけることになりました。美しい南紀白浜を災害から守り、幸せな町づくりに活躍されている子どもたちや町民の皆様の取組は、きっと私たちの心に響き、「私たちの住む町もやればできる」という意欲が湧き上がってくるものと楽しみにしております。

先日、仲川げん奈良市長と懇談する機会がありました。今、奈良市が抱えていてなかなか解決策が見つからない課題として、ムクドリの糞公害、新クリーンセンター（現環境清美工場）の新設・仮移転にあたりいかにして濡れたごみを減らせるか、JR大和路線新駅建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査をいかに安価に進められるか、などがあるようです。これらについて、「ぜひ学生さんの知恵を貸してほしい」と言われました。埋蔵調査について市長は、「自動掃除機（ル〇バなど）のように、深夜に人手をかけず文化財の有無を探索してくれるロボットはできないものか」とおっしゃっていました。発想豊かでアイデアマンである市長のこと、懇談の際に咄嗟に出たひらめきなのか、ずっと考えていらしたことなのかはわかりませんが、学生や子どもたちなら大人が考えもしなかったようなユニークで実現可能性の高いアイデアが生み出されるのではないかと、私はワクワクして聞いておりました。

アイデアは、経験や知識とともに創造性や想像力によって出現するものですが、その動機は「人々のためにお役に立ちたい」「持続可能な社会をつくりたい」というマインドでしょう。大人も子どもも、先生も生徒も、市長も市民も、皆が一緒になって考え、実行していくことは重要です。「成果発表会・実践交流会」は年に1度の開催ですが、そのような対話のコミュニティとして貴重な場であり、近畿ESDコンソーシアムが我が国の他のコンソーシアムのみならず、世界のESDを牽引していくことのできる組織であると思っています。

今日の発表や実践交流の輪が、引き続き近畿から全国へ、そして世界へと広がっていくことを願ってやみません。そして、本当に、誰一人取り残すことのない社会の実現に向け、皆で力を合わせ、ESDを着実に進めていきましょう。

2026年1月11日

奈良教育大学 学長
近畿ESDコンソーシアム 会長
宮下 俊也

2025年度 近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会開催要項

1. 目的

学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の幼稚園、小中学校、高等学校でESDの理念に基づく教育活動が展開されつつある。また、持続可能な開発目標（SDGs）への関心が企業やNPOなどの生涯教育において高まってきており、学校教育・生涯教育および企業等においても、質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、またESDの普及を目的に開催する。

2. 主催 近畿ESDコンソーシアム、奈良教育大学ESD・SDGsセンター

3. 後援 ESD活動支援センター、近畿地方ESD活動支援センター、ASPUniv.Net

4. 開催日時 2026年1月11日（日）9時50分～17時10分

5. 会場 奈良教育大学 本部管理棟大会議室、ESD・SDGsセンター多目的ホール、101教室、102教室

6. 日程

9:30～9:50 受付（奈良教育大学本部）

9:50～10:00 開会行事：大会議室 司会：阪本さゆり（ESD・SDGsセンター研究部員）
挨拶：宮下俊也（近畿ESDコンソーシアム会長・奈良教育大学学長）

10:00～12:20 ESD子どもフォーラム（発表20分＋意見交流・移動10分）
進行：奈良教育大学ユネスコクラブ 木幡美幸、河合沙良、相馬心
① 和歌山県橋本市立高野口小学校
② 滋賀県草津市立新堂中学校
③ 奈良県立磯城野高等学校
ディスカッション・タイム
講評：宮下俊也（近畿ESDコンソーシアム会長）
西口美佐子氏（近畿ESDコンソーシアム外部評価委員）

12:20～13:30 昼食休憩

13:30～15:30 ESD実践交流会（発表20分＋質疑10分）
第1分科会：大会議室
司会：橿原市教育委員会 学校教育課指導主事 本多俊道氏
① 鹿児島：薩摩川内市立市比野小学校 菊永美樹氏
② 山形：山形市立大曾根小学校 佐藤亨樹氏
③ 長野：山ノ内町立山ノ内南小学校 宇田和彦氏
④ 奈良：生駒市立生駒東小学校 竹田光陽氏

第2分科会：ESD・SDGs センター多目的ホール

司会：奈良市教育委員会 学校教育課指導主事 三木恵介氏

- ① 奈良：奈良市立平城小学校 村上雄太氏
- ② 福岡：福岡市立四箇田小学校 松田博光氏
- ③ 奈良：森と水の源流館 尾上忠大氏
- ④ 熊本：菊池市立泗水小学校 河野圭一氏

第3分科会：101教室

司会：草津市教育委員会 学校教育課学校教育係長 中村大輔氏

- ① 東京：豊島区立巣鴨北中学校 輪湖みちよ氏
- ② 奈良：天理市立福住小中学校 永原智子氏
- ③ 滋賀：草津市立老上中学校 谷口晋吾氏
- ④ 奈良：奈良教育大学ユネスコクラブ 安井優美

第4分科会：102教室

司会：橋本市教育委員会 生涯学習課主幹 弓場大樹氏

- ① 愛媛：新居浜市立浮島小学校 加藤佳緒里氏
- ② 滋賀：延暦寺学園比叡山高等学校 吉川紘永氏
- ③ 和歌山：橋本市立学文路小学校 林 克美氏
- ④ 奈良：奈良市立鼓阪北小学校 原田龍ノ助氏

15：45－17：00 ESD 講演会：大会議室
「ウェルビーイングな社会に向けた白浜町の挑戦！」
和歌山県白浜町教育長 西田拓大氏
ファシリテーター：安田昌則氏（前大牟田市教育長）

17：00－17：10 閉会行事：大会議室
講評：福井昌平氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）
挨拶：及川幸彦（奈良教育大学 ESD・SDGs センター長）

【ESD 子どもフォーラム】 10:00～12:20
橋本市立高野口小学校



草津市立新堂中学校



【ディスカッションタイム】

よかところずんばい 市比野温泉 —ふるさと伝道師になろう—

菊永 美樹（鹿児島県：薩摩川内市立市比野小学校）

I はじめに

町全体でESD教育を推進していた屋久島から転勤して、2年目の取組である。ESDの考えを生かしてふるさとコミュニケーション科の取組を行うことを通して、学校教育目標「ふるさとを愛し、確かな学力と豊かな心を持ち、主体的に行動できる子供の育成」を達成できるのではないかと考え、歴史や地域活性化に着目して実践した。

市比野小校区は一昔前まで有名な温泉街であった。現在、温泉施設は老朽化し、廃業した旅館やホテルが目立つ。小学校職員のお揃いのTシャツに「よかところずんばい 市比野」とプリントされているが、果たしてそうなのか。5年生児童25人と共に、「よかところ」を探した1年間をお伝えする。

II 実践の概要

- (1) 体験活動の重視
歴史探訪・下の湯体験・翠嵐（すいらん）
原田米店・市比野モータース
- (2) 関係者・関係組織との連携
市比野温泉地域活性化協議会・市比野コミュニティ協議会
温泉ソムリエマスター
- (3) SWOT分析の活用
- (4) 教育DXとの関連
企業との遠隔授業
オンライン交流
- (5) カリキュラムマネジメント
- (6) アンケートの活用

III 考察

- ・ カリキュラムマネジメントを行い、学校生活の中でふる・コミュ科を中心に学習活動ができるように工夫できた。
- ・ 主体的に取り組む児童の姿が多くみられ、学校教育目標の達成に近づくことができた。
- ・ 地域の方々にたくさんの協力をもらえた。児童は学習を通して、ふるさとを愛し誇りをもつことができ、これからの生き方のモデルにたくさん出会うことができた。
- ・ 実践を来年度以降に引き継ぐため、年間指導計画の作成、人材のリストアップ、次担任への引き継ぎ、全職員の気運の醸成が必要である。

自分たちの暮らしを守るために、できることを考えよう

—ESD視点での5年社会科「食料生産」の授業実践を通して—

佐藤 亨樹（山形県：山形市立大曾根小学校）

I はじめに

本校が所在する山形市大曾根地区は田園風景に囲まれ、農業が子どもたちの生活に深く根付いた地域である。本単元では、日常の中で当たり前存在する農業には諸課題があること、また農業には食料生産にとどまらない多面的な機能があることを理解できるようにすることをねらいとした。さらに、山形県が高い食料自給率を誇り、各家庭で行われている家庭菜園もその一端を支えていることを学ぶことで、自らの生活と日本の食料問題とのつながりを捉え直す学びへとつなげていきたい。

II 実践の概要

①問題意識を高める導入「食べ比べ体験」

本単元では、令和の米騒動を契機に注目された「備蓄米」の意義について考察する活動を通して、子どもたちが日本の食料生産の課題に主体的に迫ることができるよう単元を構成した。単元導入では、山形のブランド米であるつや姫と政府備蓄米の食べ比べを行い、見た目や味の違いを比較する体験から、「日本では多くの米を生産しているのに、備蓄米は本当に必要なのだろうか」という学習問題を設定した。



図1 米の食べ比べ体験

②ゲストティーチャー（以下 GT）へのインタビュー

日本の農業の現状を当事者の立場から捉えるため、「令和の百姓一揆」代表 菅野芳秀氏を農家の代表として招き、インタビュー活動を実施した。インタビューでは、農業が抱える課題や、農業の多面的機能を含めた意義について話を聞いた。



図2 GTへのインタビュー

III 考察

本稿は単元の途中段階での執筆であるため、現時点における成果（○）と課題（△）について整理する。

○調べ学習の段階から、子どもたちは農業が抱える課題について、事実として一定の理解をしていたが、GTから直接話を聞くことで、その課題がより切実な問題として実感を伴って捉えられたことがうかがえた。特に「消費者が生産者を応援する社会になる必要がある」という言葉は印象深く、行動化に向けて学びの方向づけができた。

△農業の多面的機能について話を聞いたが、子どもたちの意識は「自分たちの暮らしを守る＝食を守る」に偏る傾向が見られた。GTとの事前の打合せが十分にできなかったことも影響していると考えられる。ねらいに即した学びを実現するためには、当日の発問や授業展開、授業全体のコントロールを含めた一層の工夫が必要である。

私たちがえがく誰もが住み続けられるまち

—3年間継続したお年寄りとの交流を通して—

宇田 和彦（長野県：山ノ内町立南小学校）

I はじめに

子どもたちは、3年間お年寄りとの交流を続けてきた。「お年寄りに喜んでもらいたい」という願いのもと、工夫しながら交流を重ね、自分たちがお年寄りに与える喜びの大きさを実感すると同時に、その喜びが自分たちの幸せにもつながるという気づきを得た。また、お年寄りから温かさや励ましを受け取り、関わり合うことによさにも気づいていった。この学習から子どもたちに、お年寄りが安心して暮らせる環境づくりや交流の輪を広げることが、誰もが住み続けられるまちづくりにつながることを感じてほしい。また、自分自身に人や社会に影響を与える力があることも感じてほしいと願っている。

II 取り組みの概要

- ① 交流の始まり：4年生の時から社会福祉協議会をはじめとする学校外の様々な方々との協働のもと「わくわく商店街」（一人で買い物に行きにくい高齢者を車で送迎し、買い物やお茶飲み場での会話を楽しんでもらう活動）に参加し、地域のお年寄りとの交流を続けてきた。子どもたちは、はじめは声をかけることに不安があったが、笑顔や「ありがとう」の言葉に励まされ、自分たちにできる工夫を進んで考えるようになった。
- ② 交流での気づき：交流の中で注意を受けた経験をきっかけに、お年寄りについて調べたり、「介護」「認知症」について学んだりする中で、高齢者は人との関わりが減ることで孤独や寂しさを感じることもあると理解した。また、お年寄りは、買い物だけでなく、ふれあいや会話が大きな楽しみであることに気づき、「もっと気軽に話せる場をつくりたい」と考えた。
- ③ 交流の場とこれから：そこで、地域のお年寄りを学校に招く「南小おたっしや会」を企画した。当日は、歌や手遊び、会話を通して和やかな時間を過ごした。ふり返りでは、「いっぱい話ができ、うれしかった」「笑顔で『よかったよ』と言ってもらえて、自分がうれしくなった」など、自分たちの関わりが誰かの喜びにつながっているという実感と満足感を得た。この経験から子どもたちは「家族以外と交流する機会が少ないお年寄りにとって、子どもと話すことはうれしいと思う」と想像したり、「これからもあいさつや、わくわく商店街訪問を続け、喜んでほしい」と願ったりした。

III まとめ

この学習で、お年寄り子どもは、ともに喜びや活力、学びを得ている。今後の社会を見通すと、高齢者も子どももかかわり合い、従来の地縁だけでなく、子どもを縁とした新たなつながりによるまちづくりが求められていると感じる。

命の尊さから、人と生き物が共に生きる道を考えよう

—身近な動物との関わりを通して—

竹田 光陽（奈良県：生駒市立生駒東小学校）

I はじめに

私たちの周りには様々な生き物が生息しており、ゴキブリなどのように人に不快感や嫌悪感を抱かれやすい生き物もいれば、逆に多くの人に可愛がられるものもある。様々な生き物に対してどのような関わり方をするかは、その人それぞれがもつ価値観によって異なる。本単元は、どんな生き物を大切にすべきか、駆除してよいのかについて考える活動の中で、児童への揺さぶりを生み、人と生き物の共生を考えるきっかけとなる単元設定を行った。

II 単元のねらい

- ・ 普段あまり意識しないような身近な生き物の命の尊さを感じ、自分たちの行動が生態系や未来に影響を及ぼす可能性を理解する。
- ・ 生態系保全の在り方や生き物との共存の在り方について、自分の考えをまとめ、表現する。
- ・ 生き物のつながりの中にいる一人の人間として、生き物を大切に想い、接する態度を育む。

III 実践の概要

1. **気づき**：「奪ってもよいと思う命」「奪ってはいけない命」について、児童が自分の考えを伝え合う活動を通して、考え方の違いに気づく。
2. **理解**：動物園、水族館・博物館での学習や外来種問題に触れ、生態系保全の必要性や「命の選択に伴う葛藤」を感じる。【**命に対する矛盾①**】
3. **行動・実践**：学校敷地内にある荒れた「学びの池」を再生させようと計画し、身近な環境保全に取り組む。
4. **発信**：低学年に向けて発表を行い、環境保全について理解を深める。
5. **振り返り**：今まで意識しなかった小さな命の住処を奪う事実気づき、人と生き物が共存するために最適な道を考える。【**命に対する矛盾②**】

IV まとめ

生き物と共生を考える上では、単に「命を大切にしよう」という結論に留まるだけでは不十分である。「すべての命を救うことはできない」、「人は食う・食われる関係の中で生きている」という事実に向き合い、葛藤を直視することで、責任ある選択を主体的にすることができると考えた。命の矛盾や葛藤を受け止めながら、人と生き物の共生を模索し続ける姿勢を育てることが、本単元の核心である。

地域の文化と日本の文化

—「人との出会い」を核とした教科横断的な学び—

村上 雄太（奈良県：奈良市立平城小学校）

I 単元の設定とねらい —人を通して文化を知る—

本単元の中心には、常に「人との出会い」がある。校区に住んでいた日本画家の上村淳之氏、美術館の学芸員、日本画指導の教師、伝統を守る墨職人、そして地域の住民たちから「地域の文化と日本の文化」を学ぶことは、単なる知識の習得ではなく、文化を継承してきた人々の「生き方」や「思い」に触れることである。本実践では、児童が「人」との関わりをカリキュラムの核に据えた。その上で、彼らの思いを深く理解し、自分たちの思いを届けるための手段として、国語、社会、道徳、図画工作など他教科の学びを関連付ける（カリキュラム・マネジメント）構成とした。

II 「人」とつながり、学びを深める展開

児童の探究は、人と出会い、その人を知りたいという願いから、教科の枠を超えて学びは深まっていった。

1. 上村淳之氏・学芸員との出会い（1学期：知る・調べる）

3年生の頃に出会った上村氏に対する「この平城の地で何をして文化勲章を受章したのか」という問いから、美術館見学に行ってみようという学習が始まる。

2. 日本画制作・墨職人長野氏との出会い（2学期：体験する・経験する）

道徳科「君の家にも牛がいる」で生命のつながりを学んだ上で、図工では本物の膠を使用した日本画制作に臨んだ。

社会見学での長野氏指導の下「にぎり墨体験」を行った。そこから、社会科・国語科での伝統工芸の学習と結び付け、学習を深めた。

3. 地域の人々との出会い（3学期：伝える・つなぐ）

児童自身が文化の「つなぎ手」となり、地域の人々である家族へ思いを届ける「平城万博」の開催である。その後、「なぜ、上村氏はこの平城の地で絵を描き続けたのか」という問いから、平城地域の魅力再発見に迫る。

III 考察

本実践の成果は、児童の意識と行動の変容、そして郷土への愛着の深化にある。地域固有の「本物」である上村淳之氏の作品や墨づくりを教材化したことで、児童は地域の文化を「自分たちの町の物語」として捉えることができた。児童は文化を単なる知識としてではなく、未来へと継承する「担い手」としての責任感を深めることができた。一方で、今後の課題は継続性の確保である。本年度のカリキュラム・マネジメントによる学びを一過性のものとせず、次年度以降へどう接続するかが問われる。今後は、高学年での世界遺産学習や平和学習へと系統的に位置づけ、持続可能な社会の創り手を育む教育課程の構築を考えていきたい。

四箇田団地を 人気者にしよう！ — 地域貢献への手応えを感じる —

松田 博光（福岡県：福岡市立^{しかた}四箇田小学校）



写真1 四箇田団地

I はじめに

かつて“西日本最大規模”と謳われた四箇田団地。本校は、主に四箇田団地に居住する児童を想定した学校として、47年前に開校した。しかし現在、団地には空き部屋が目立ち、さらに高齢化も進んでいるため、本校に在籍する児童は非常に少ない。また、団地住人の町内会加入率は2割にも満たないため、団地の地域行事も減少・縮小傾向にある。つまり四箇田団地は、本校区の中心的存在であるにも関わらず、若年層の転入促進やコミュニティ維持のためのイベントなどの取り組みの必要性など、大きな課題を抱えている。

ところが四箇田団地内には、さまざまな遊具や広場・駄菓子屋などあり、今なお地域の子ども達にとって、非常に魅力的な場所である。そんな四箇田団地を自分たちの力で盛り上げ、人気者にしていこうというのが本学習のねらいである。

その際、実際に地域の方の話を聞いたりサポートしたりしてもらおうなど、地域社会と連携しながら想いを実現させていくという過程も大切にしたい。最終的には子ども達が、「地域貢献」の手応えを感じることができるよう学習を目指した。



写真2 人気の「ゴリラ砂場」

II 取り組みの概要

前期の総合学習で「地域のじまん」を調べた際、四箇田団地には“ひみつの遊び場”がたくさんあったことを想起。まずはそんな“ひみつの遊び場”について詳しく調べ、1年生に教えてあげることが目的に学習を進める。その過程で、かつての四箇田団地の輝きを取り戻したい、四箇田団地をもっと人気者にしたいという地域の方（白石自治協議会長・かつての住人青木さん など）の願いにふれ、そこから、自分たちが四箇田団地を盛り上げることができないかを考える。そして、実際に四箇田団地を盛り上げようとしている方（特定非営利活動法人「なごみの家」の宮川さん・宮寄さん など）の力を借りながら、自分達で考えたイベントを通して四箇田団地を盛り上げていく。

(1) 四箇田団地“ひみつの遊び場”MAPをつくらう

- ① “ひみつの遊び場”ってどこ？
- ② “ひみつの遊び場”マップづくり
- ③ 1年生や地域の方へ発表

(2) イベントで四箇田団地を盛り上げよう

- ① 地域の方の話を聞こう
(白石自治協議会長・「なごみの家」代表宮川さん)
 - ② イベントの企画・準備
 - ③ 「四箇田団地まつり(仮)」を開催
- (3) これまでの取り組みをふりかえる



写真3 1年生への発表会



写真4 地域の方の想いを知る

III 今後の展望

地域社会と学校とが連携しながら子ども達が地域への愛着を深めるとともに、「自分たちで地域に貢献できた！」という自己効力感を持ち、地域貢献への意識を育んでいくことができればと願っています。全国の先生方からたくさんのアドバイスやご意見をいただけることを、楽しみにしております。

授業づくりで 地域と人が かがやき つながる！

—吉野川紀の川源流を拠点とした学習連携—

尾上 忠大（奈良県：川上村 森と水の源流館）

I 川上村と森と水の源流館

川上村は奈良県の南東部、紀の川（奈良県では吉野川）の源流に位置します。大和平野の田畑を潤す吉野川分水の水源地となる大迫ダム（農林水産省管理）、1959年の伊勢湾台風を機に建設されることとなった大滝ダム（国土交通省管理）と合わせ、村には3つのダムがあり、あとの1つは「緑のダム」です。

吉野林業発祥の地として、手間ひまをかけて人工林を維持してきたとともに、村では手つかずの天然林を「吉野川源流－水源地の森」として保全しています。「私たち川上は、かけがえのない水がつけられる場に暮らすものとして、下流にはいつもきれいな水を流します」などの『川上宣言』をもって「水源地の村づくり」に取り組んでいます。村の考えや取組を伝え、環境学習等の事業を通じて流域とのつながりを広げるため、2002年森と水の源流館がオープンしました。

II 森と水の源流館ESD授業づくりセミナー

近畿ESDコンソーシアムの一員として、2017年度から「森と水の源流館ESD授業づくりセミナー」を実施。吉野川紀の川や吉野川分水でつながる地域の学校の先生方が「水の恵み」や「森林環境」に着目した授業づくりに取り組むにあたり、館からの情報提供のほか、奈良教育大学の先生方による単元デザインに関する助言を受けて、相互に意見交換や交流をしながら、指導案を作成し、授業実践の進捗状況や結果を共有します。

開始当初、館スタッフの各専門や得意分野からの素材提案や情報提供をイメージしていましたが、年々取組むにつれ、ダムを取り巻く多様な視点や、過疎対策、観光施策、バーベキューゴミの問題など、地域づくりそのものを教材としていただくようになりました。多くの先生が「川上宣言」に関心と敬意を示されます。そのような授業では、川上村役場や村民の方にも「ゲストティーチャー」として参画いただきます。授業づくりを通じて、村自身が地域を見つめ直し、地域の人がいきいきとする機会を与えられ、地域がよくなると感じます。

III 地元「かわかみ源流学園」での試み

2024年度、川上村に唯一の学校「かわかみ源流学園」（義務教育学校）が開校しました。ここには「ESD」という概念は普及していませんが、森と水の源流館では1～9学年それぞれの総合的な学習の時間のお手伝いをしています。その中で私たちはESDの観点を重視しています。また「ESD授業づくりセミナー」での経験が生きています。9年間の連続性を効果的なものとし、児童・生徒の関心をもとに地域ならではの素材を取り上げ、役場や地域の人々を巻き込みながら、みんなが学校とともに学びあうことをめざす試みに着手したところです。

故郷を愛しみ、自他を尊重する児童の育成をめざして — 教員のウェルビーイングを高める学校経営を基盤として —

河野 圭一（熊本県：菊池市立泗水小学校）

I はじめに

本校は平成17・18年度県下に先駆けて文部科学省から「学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）研究推進校」の指定を受け、学校運営協議会制度を導入しました。地域や家庭が学校と協力し、学校運営に参画することで、地域に開かれ信頼される学校を創り上げてきた。

地域や保護者が、学校の応援団として様々な学校の取組に協力してくださる反面、学校が地域に貢献する場面が乏しくなる傾向が見られた。

そこで、児童会活動を中心に自分たちの故郷にどのようなお返しができるかを検討し、実践を行った。

また、児童の幸せを実現するためには、教員の幸せは不可欠である。教員不足が叫ばれる今日、持続可能な学校経営についても取り組んだ。

II 実践の概要

(1) 児童会による地域貢献の取組

- ①「新泗水音頭」の復活と夏祭りへの参加
- ②幼稚園での読み聞かせの実施
- ③「フードドライブ」の取組
- ④福祉施設等への花苗の贈呈
- ⑤児童会と学校運営協議会との連携

(2) 教員のウェルビーイングを高める取組

- ①日課表の見直し
- ②教員アンケートの実施と改善案の検討と実施
- ③教員の負担感軽減のための具体的な取組の実施
- ④平日交代年休取得制度の実施

III 成果(○)と課題(●)

(1) 児童会による地域貢献の取組

- 児童会による地域貢献の取組により、より地域と連携した教育活動を行うことができた。
- 児童が、自分なりのテーマを持って1年間活動することで、より具体的な地域貢献活動が提案され、実現することができた。
- 地域貢献の具体的な内容を更に検討していく必要がある。

(2) 教員のウェルビーイングを高める取組

- 教員の負担感の軽減がなされ、やりがいや有用感を感じている教員が増加した。
- 若手教員も多く、適切な支援や研修の場の設定が必要である。

巣鴨人（すがもん）プロジェクト — 地域のあり方を考え、表現する —

輪湖 みちよ（東京都：豊島区立巣鴨北中学校）

I はじめに

2011年の東日本大震災は、都区部の課題を浮き彫りにした。道路の大渋滞に帰宅困難者の行列、当時新宿区で勤務していた私は、これまでに見たこともない光景を目にし「もし、都区部で大地震が起きたら…」と考えずにはいられなかった。そして、都区部で働く教員として、生徒に自分や他者の命を守る力や、地域の人や歴史を知り、地域の一員として行動する態度を身に付けることこそが自分の使命だと考えるようになった。以降、ESDを学びながら、防災・減災やまちづくり学習に取り組んでいる。

II 実践の概要

(1) これまでの取組：一学期

校区には江戸時代から続く種屋や江戸六地蔵にとげ抜き地蔵、庚申塚といった史跡や「おばあちゃんの原宿」として知られる地蔵通り商店街など、地域を学ぶさまざまな財がある。まずは、中学生の視点で地域を再発見してもらいたいと考え、社会科の「身近な地域の調査」で調査活動を行った。

①地域の「？」を発見しよう！：3月～5月春休み・GWの宿題

通学路で見て「？」と思ったものを撮影し、スライドにまとめた。

②地域の「？」を調査しよう！：6月

班内で各自の「？」を発表し、調査テーマを決め、調査計画を立てた。授業で野外調査を行い、班ごとに調査結果をスライドにまとめ、発表しあった。

③巣鴨って、どんな地域？：6月

調査結果を基に、各自が「巣鴨って、どんな地域」かを考え、表現した。

(2) 今後の取組：二～三学期

社会科「日本の諸地域」で各地方の人々の工夫や努力を事例として学んでいる。今後、社会科の「身近な地域のあり方」でよりよい地域に向けた構想をし、総合でその構想を形にする予定である。

III その他

(1) 学びのつながり

総合では一学期に「本当に行きたい職場体験先決定プロジェクト」、二学期に「都内巡り企業ミッション」に取り組み、自己理解を深めながら、探究的な学びを行ってきた。「地域の魅力UP大作戦」では、これまで身に付けてきた力を活かし、課題発見から解決策まで、生徒自身で行う。

(2) 外部とのつながり

①地域：町会役員や商店街理事など住民へのインタビュー

②大学：生徒の対話におけるファシリテーター、大正大学地域創生学部

③助成：心豊かな社会をつくるための子ども教育財団（探究伴走支援）

身近な素材から新たな価値を生み出す — アップサイクルでひらく新しいものづくり —

永原 智子（奈良県：天理市立福住小中学校）

I はじめに

本実践は、中学校技術科における「アップサイクルに挑戦しよう」の授業である。3Dプリンターの造形過程で生じるPLA廃材やペットボトルキャップなど、身近な“ゴミ”として扱われてきた素材を、新たな価値をもつ製品へと再生するアップサイクルの学習を通して、環境問題を自分事として捉え、持続可能な社会の担い手として必要な視点を育てることをねらいとした。

生徒はこれまで木材加工や3DCADによる設計などを学習してきたが、身近な素材に潜む価値に気づき、それらを生かして社会や地域に貢献しようとする発想は十分とはいえない。そこで、廃材の特徴を科学的に理解し、それを自らの創意工夫によって新たな資源へと転換する経験を位置付け、技術科の学習とESDの視点をつなぐ実践を行った。

II 実践の概要

- (1) 3Dプリンター廃材（PLA）の特性を調べ、生分解性や熱溶解性などを既習内容と関連付け。
- (2) 廃材を実際に加熱・再成形する活動を行い、身近な素材を資源として生かす体験。
- (3) プラスチックによる海洋汚染や世界の「Precious Plastic」の取り組みを調べ、環境とのつながりを考える。
- (4) 福住校区の自然・文化など「地域の素敵」を出し合い、アップサイクル作品のデザインを構想。
- (5) ペットボトルキャップを裁断・加熱成形し、色や模様を工夫を取り入れながらオリジナル作品を制作。
- (6) 活動の振り返りを通して、資源の捉え方や環境への自分の関わりを考える学習につなげる。

III 成果と課題

◆成果

- ・廃材を「資源」と捉える価値観の変容が見られ、アップサイクルへの意欲が高まった。
- ・プラスチック問題を自分事として捉え、行動につなげようとする主体性が育まれた。

◆課題

- ・成形加工の温度管理や安全確保など、技術面での指導の工夫が必要である。
- ・調べ学習と実践をより体系的につなぐ学習構成の精緻化が求められる。
- ・学習後の行動継続につながる仕組みづくりや教科を横断した連携をさらに検討していく必要がある。

ビブリオバトル

～ 本を通じて人を知る 人を通じて本を知る ～

谷口 晋吾（滋賀県：草津市立老上中学校）

I はじめに

本校をはじめ、草津市内の小、中学校では昨年度から「スクールESDくさつプロジェクト」と称してESDの視点を取り入れた授業を行っている。本校では、総合的な学習の時間において、学年ごとにテーマを設け特色ある教育実践に取り組んでいる。しかし、昨年度の実践を通していくつかの課題が明らかになった。まずは、総合的な学習の時間だけでなく教科を往還した取組の必要性だ。批判的に考える力やコミュニケーション力は、一つの教科だけで育成するのではなく、複数の教科において、それらの要素を取り入れながら指導することが重要だと考える。そこで私は、国語科においてESDの視点を取り入れた授業実践を試みた。国語は言語を扱う教科であり、言葉を知り語彙を広げることは、自分の表現力を広げることにつながる。本実践は、本を通して語彙の獲得、そして表現力の向上をめざした。また、語彙を広げることで、自分の伝えたいことの解像度（抽象度を下げて、具体性を高めること、五感や時間・空間の情報を加えること、読み手の理解を助ける文脈を補うこと、曖昧な言葉を具体的な言葉に置き換えること）を上げることがねらいとした。

II 授業の概要（全10時間）

・ビブリオバトルとは何かを知り、バトルに用いる本を決める。

・夏休みの課題として「読書感想文」に取り組む。

・本の魅力を伝えるPOP作りに取り組む。

（学校司書の方と連携を図り、本の魅力が伝わるPOPを作る。）

・ビブリオバトルに向けて準備を行い、実施する。

（動画や音声撮り本番に向けて練習を行う。）

・単元の振り返りを行う。

・完成したPOPは校内に掲示し、文化祭や、学校公開に合わせて保護者に向けて発信する。その際、録音した音声データを学校ホームページから聴くことができるようにした。

・草津市立図書館の協力を得て、館内にPOPを掲示する。

同時に音声データも聴けるようにすることで、地域に向けて学習成果を広く発信する。

III 成果と課題

ビブリオバトルを通して本に触れる機会を多く作ることができた。発表では、他者に自分の思いをわかりやすく伝えるために文章の構成を考えたり、具体的に話したりすることができた。また、質疑応答など他者とのやり取りの中で、自分の疑問点を聞いたり、新たな目線で物事を考えたりすることができた。

改めて、持続可能な社会の創り手を育成するために、言葉を操り、自己表現することの重要性を感じた。日々の授業の中で、このような視点をもって授業を構成することが必要になるのだと考える。



ユネスコクラブのESD活動 2025

— 大学生が伝える —

安井 優美（奈良教育大学ユネスコクラブ）

I はじめに

奈良教育大学ユネスコクラブは「ESDを実践できる教員になること」「ESDを楽しく追究すること」を目的とし、様々なESD活動を行っているサークルである。2025年度の主な活動は、子ども支援・地域イベントへの参加・他大学で活躍する団体、次世代ユネスコ国内委員会をはじめとする他団体との連携などがあげられる。

II 実践事例の概要

（1）平城京跡青春プロジェクト「おぎの美術館」への参画

8月～10月にわたり、平城京跡で開催する「おぎの美術館」のプロジェクトに取り組む、奈良女子大学住環境学科の学生と連携し、活動を進めた。「おぎの美術館」とは、平城宮跡に広がるおぎの群生地にて外来種のセイタカアワダチソウが浸食している課題を解決するため、群生地を整備し、木のフレームやベンチを設置することで自然とアートの共生を目指したものである。

活動内容は、奈良市伏見小学校の5年生に向けた出前授業を行った。出前授業では、模擬ゲームなどを通して、外来種の及ぼす影響や生物多様性の必要性について説明し、自然の保全をするためにすべきことを一緒に考えた。その後、奈良女子大学の学生から自然の保存に向けた活動として「おぎの美術館」の説明をした。また、今年は刈り取った外来種を活用し草木染めを行った。児童たちは授業にも積極的に取り組み、生物多様性などの課題を理解した上で主体的に考えた活動になった。

（2）大阪・関西万博 防災・減災ワークショップ

4月から10月にわたり開催された大阪・関西万博において、9月7日（日）に防災・減災に関するワークショップを実施した。小中高生とその保護者を対象とした内容で、当日は約80人が参加した。「あなたの防災意識がみんなの命やまちを守る」をテーマに、世界で発生している災害や地震の仕組みを知り、生活や社会への影響を考えながら、クイズ形式で被災時の行動や災害への備えについて学んだ。参加者が自身の住む地域の特徴から災害が起こる可能性を感じ取り、災害に対する備えや必要な対策について理解を深めることができる活動となった。

III 終わりに

今年度の活動では、大学生という立場を生かし、子どもたちと近い距離で関わりながら学ぶことができた。今後は、学生自身の学びも深めながら、子どもたちが身近な地域を通して地球より自分のこととして考えることができるような支援や活動を行っていきたい。

全校児童で取り組むESD

— 浮島マルシェ 子どもたちの地産地消 —

加藤 佳緒里（愛媛県：新居浜市立浮島小学校）

I はじめに

本校は、小規模校ならではの強みを活かし、地域と学校が一体となって未来の担い手を育む、「地域協働型の学び」を実践する。子どもたちが、地域の基幹産業である「食」と「農」を軸に、地元の豊かな恵みや生産者の想いに直接触れる活動を展開する。そして、学年の枠を超えた活動や地域住民との交流を体験し、持続可能な地域社会の一員としての自覚と、未来の食料生産や環境に対する多角的な視点を養うことを目指す。

II 実践の概要

- (1) 地元の農家やJAとの連携を通して、地域の基幹産業である農業への理解を深め、生産者との交流を通して食の大切さを学ぶ。
- (2) 浮島校区で生産される新鮮な特産物を活用することで、地元の豊かな食材に触れ、旬の味覚を体験し、食に対する関心を高める。
(6年 理科「人と環境」里芋の出前授業、収穫体験)
(6年家庭科「環境に配慮した料理を作ろう」レシピ作成)
- (3) 学校の農園ではなく、実際の農地を活用することで、より本格的な農作業を体験し、作物が育つ過程や農家の苦労を肌で感じる。
(1、2年生活科「野菜をそだてよう」サツマイモの定植、収穫)
- (4) 単なる体験活動に留まらず、生産作業の補助活動を通して、責任感や協調性を育み、主体的に地域社会に関わる意識を高める。
- (5) スマート農業や機械化された農業を見学することで、現代の農業技術に触れ、将来の食料生産や地域産業の可能性について考える。
(5年 社会科「これからの食糧生産とわたしたち」スマート農業)
- (6) P T Aとの連携による校区文化祭「浮島マルシェ」への出店は、子どもたちの学びの成果を地域住民に共有する機会となり、学校と地域社会の一体感を醸成し、地域活性化に貢献する。
(3年 総合的な学習の時間「浮島のいいところ」サツマイモの商品化)
(4年 総合的な学習の時間「環境について考えよう」里芋の商品化)

III 考察

「地元の恵みを活かした食育」や「本格的な農業体験」を通し、新鮮さ、旬、生産者の想いを直接感じたことで、地産地消の質的な利点（味、安全性、環境配慮など）を深く理解することができた。「浮島マルシェ」での商品販売と学びの成果の共有により、地元の特産品の価値を再認識し、地域経済への貢献など社会的な利点への理解が広まった。現在は、「食」と「農」が中心だが、地域のお他産業（例：漁業、製造業、観光業）との連携も検討することで、子どもたちが浮島校区全体の持続可能性についてより広く考えることができるようにする。

教室で使うパッチワーククッションを作ろう

— つくる責任、つかう責任 —

吉川 紘永（滋賀県：比叡山高等学校）

I はじめに

本実践は、高等学校2年生「家庭基礎」の被服実習で行った取り組みである。小さな布をつなぎ合わせてつくるパッチワークは、もともと端切れ布を無駄にしないために生まれた生活の知恵であり、資源を大切に扱うための手法の1つである。また、クッションの中に入る綿素材は綿花の栽培に大量の水や労力を必要とする資源であり、綿を大切に扱うことは環境・労働・社会の問題と密接に関わる。これらの素材の背景を理解し、実用品として教室で使用できるクッションを制作することで、ものを大切にしようとする姿勢を身につけ、持続可能な消費生活を考えられるようにした。

II 実践の概要

- (1) 綿花ができるまで
滋賀県彦根市の綿花農家の思いを知る
- (2) パッチワーククッション製作(自分たちのお困りごとを家庭科で解決)
図案作成→型紙作成→印つけ・裁断→パッチワーク→本体縫い合わせ→完成→クラス発表会→振り返り
- (3) パッチワーククッションの作品紹介



「夢の中へ」



「坐る」



「パワプロくん」

III 成果と展望

(1) 成果

綿花農家さんの実際のお話を聞いて、生徒一人一人が消費生活や消費行動について考える大きなきっかけとなったように思える。生徒たちがお気に入りのクッションを作るために、没頭してパッチワークに取り組む姿がとても印象的だった。教室で多くの生徒がこのクッションを座席に置いており、移動教室に持っていくほど、日常的に使用している様子が伺える。

(2) 展望

今後はパッチワークの技法を用いて、飛ぶ役目を終えたパラグライダーの生地を使用し、被服実習においてアップサイクルに取り組んでみたいと考えている。カラフルなパラグライダーの生地はきっと生徒たちの創作意欲を掻き立て、循環型社会を考えることのきっかけにできるのではないかと考えている。

「KamuKamu交流Day」が目指す未来

林 克美（和歌山県：橋本市立学文路小学校）

I はじめに

本校では今年度、近畿ESDセンターの支援を受けながら、「地域と繋がるにはどうすればよいのか？」というテーマで取組を進めている。地域との連携を具体化する組織としては「KamuKamu交流Day」を立ち上げ、学校と地域が交流し始めたところである。この会では、学校と地域との交流、地域住民同士の交流、地域課題への取組等を行う予定であるが、そこに子どもたちも参画するのが大きな特徴である。子どもたちの参画は「持続可能な社会の創り手」の育成を目指すものであり、その出発点として大切にしているのが「当事者意識」である。子どもたちの当事者意識に影響を与えるのは、私たち大人の姿だと考える。また、そのゴールを「共同体感覚」という人と人との関係性や繋がりに置いている。「自分の存在が他者によって認められていると相互に感じられるような関係性やコミュニティをつくる」ことが社会全体のWell-beingに繋がると考える。

II 実践の概要

(1) 第1回KamuKamu交流Day

日時 9月19日(金) 15:30～16:40

場所 音楽室

参加 50名（教職員12名、地域住民28名、スタッフ10名）

テーマ 20個のテーマの中から各班で自由に選ぶ

その他 音楽をかけ、お茶やお菓子も用意しながら楽しい時間を過ごせるようにした。

(2) 第2回KamuKamu交流Day

日時 11月3日(月) 14:40～15:35

場所 体育館

参加 約100名（教職員12名、児童50名、地域住民33名、スタッフ5名）

テーマ 学文路の昔・今・未来について

その他 この回は、本校の創立150周年記念イベントの1つとして開催された。

III 今後の展望

本校の取組はまだ始まったばかりであるが、教職員や児童が参加する形を作れたのは良かったと思う。一方、残された課題は人集めの難しさにあるが、これからも根気強く2カ月に1回のペースで継続していきたい。

本校は6年後の他校への統合が予定されており、今後は学校が中心となった運営から次第にその主体を地域へと移行させ、最終的には学校が地域に溶け込んでいくようなイメージを描いている。そして学校がなくなった後も、その校舎が地域課題を解決するための住民交流の場として機能していくことを期待している。

命と未来を守る減災教育を目指して —情報をクリティカルに捉える力の育成—

原田 龍ノ助（奈良市立鼓阪北小学校）

I はじめに

実践校は、洪水・土砂災害リスクがほとんど無く、地震危険度ランクも比較的 low、安全な区域であるため児童の防災・減災意識が高まりにくいことが課題である。また、気候変動による「想定外の災害」が常態化している現在、知識だけではなく「対応力」と「クリティカルな情報判断力」が必要であると考えられる。そこで、本実践では、ハザードマップをクリティカルに捉える事で防災・減災意識の向上を目指した。

II 取り組みの概要

(1) VRによる体験学習

NHKの協力のもと、能登半島大地震の被災地を記録したVR映像を見せていただいた。VRの良さは、没入感を生み出せることであるとを感じる。ニュースで見る映像以上に、情報を得ることができるので、災害を自分事化するためには有効な手段であると考えられる。

(2) 自主防災組織の方々との学習

地域の自主防災組織の方にゲストティーチャーとして来ていただき、地域の防災マップと防災活動、防災倉庫についてお話をしていただいた。マップ作成は、一筋縄ではいかず苦労された話などを聞き、防災・減災の必要性を感じるきっかけをいただいた。また、児童は防災倉庫の中を見せていただくことで、避難するときの準備物を具体的に考える機会になった。

(3) 校区防災マップの作成

校区の防災マップをさらにアップデートさせるにはどのような工夫が必要なのか、児童と検討した結果、「避難の際の危険個所を示すこと」に決まった。そこで、登下校ルートでの危険個所を撮影し、学級で共有をしてオリジナル防災マップを作成した。災害時の危険に対するアンテナを強化できたと考えられる。また、情報をクリティカルに捉える力の育成にもつながった。

III 成果と課題

(1) 成果

- ① 災害・警報を軽視する発言が減少した。
- ② 地域の防災訓練に参加する児童が増えた。
- ③ 減災・防災意識ともに高めることができた。

(2) 課題

- ① VR体験をする際のトラウマの配慮が必要である。
- ② 学校内や家庭、地域への波及が不十分であった。
- ③ 継続できる活動が無かった。

【ESD 講演会】 15：45～17：00

ウェルビーイングな社会に向けた 白浜町の挑戦！

講師：和歌山県白浜町教育長 西田拓大氏



和歌山県白浜町にて中学校理科教員として24年間勤務。続いて教頭職3年、小学校校長1年、さらに中学校校長を2年間務めた。

（「学校はウェルビーイングなパワースポットを目指した」取組）

令和7年4月より、白浜町教育委員会教育長に就任。

曹洞宗如々山不動寺九世住職（僧侶としても兼務）、WBDC ファシリテーター、2030 SDGs ゲーム公認ファシリテーター、SDGs for School 認定エデュケーター、DFC ファシリテーター。

教育観：「学校はウェルビーイングなパワースポットでありたい」という信念のもと、児童生徒だけでなく教職員・地域住民も含めた“みんなが心地よく・生き生きできる場”づくりに取り組んできた。

ESD（持続可能な開発のための教育）への関心：SDGs・地域連携・子どもの主体性を重視し、教育活動の中に「環境・人権・平和・命」のテーマを統合。たとえば、地域の資源を活かした学びや、AI・デジタルツールを用いた未来型学びの実践に関わる。

ウェルビーイング実践：心と身体と関係性の健康を育むため、教職員や児童生徒が「安心して学び・働ける場」を作ることに力を入れてきた。心理的安全性・対話・自己肯定感向上をキーワードに、教育現場改革を推進。

教育長として白浜町を「子どもの権利が保障され、学びと暮らしが調和する町」として発展させるべく、

- ・「子どもの権利条約」を教育行政の柱に据えた制度・文化づくり
- ・教育・観光・福祉・地域をつなぐ“ウェルビーイング都市”づくり
- ・地域をフィールドとしたESD・未来型学びプロジェクトの展開

を抜本的に推進していくことを掲げている。



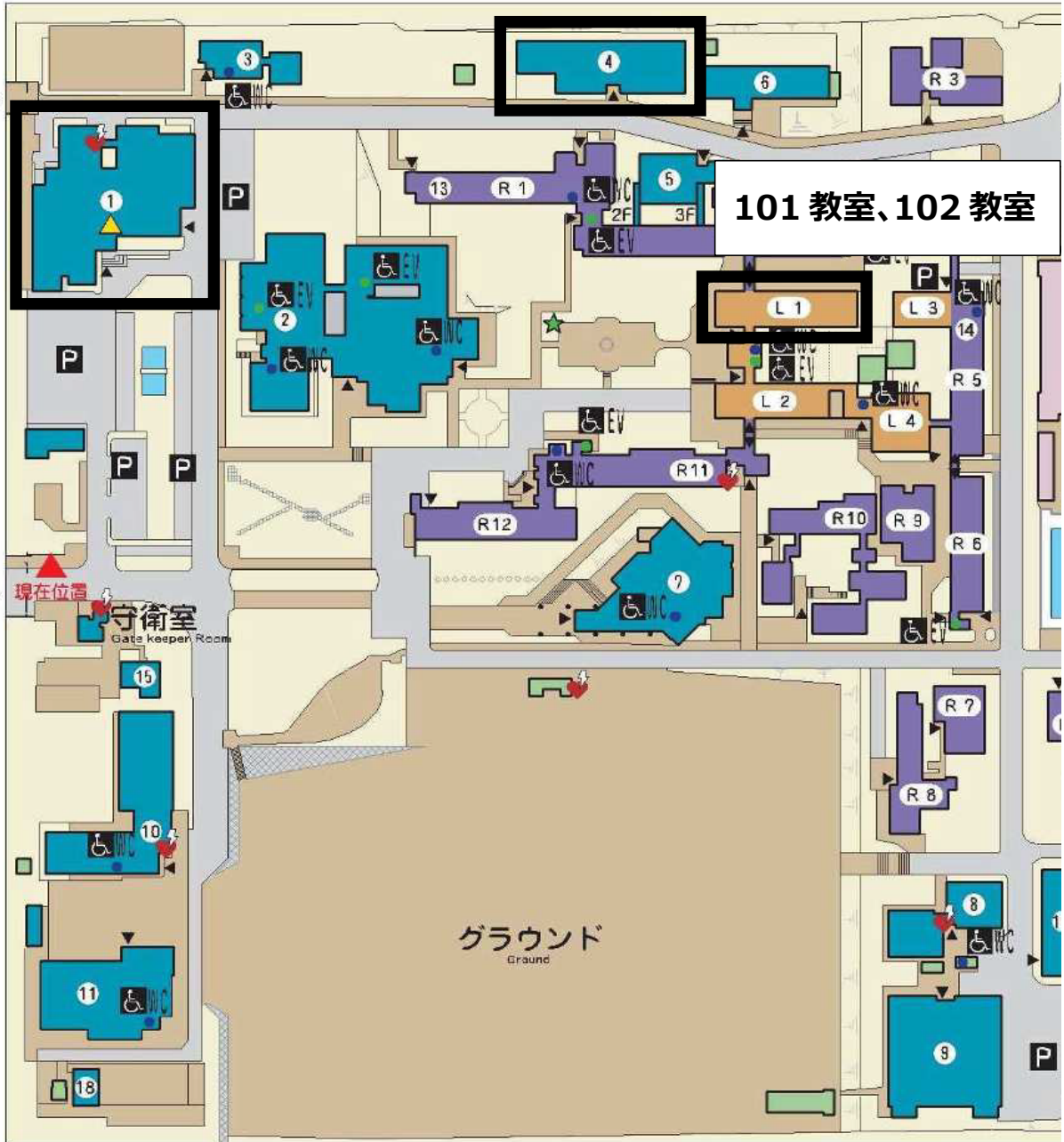
Memo.....

.....

ESD・SDGsセンター

管理棟

正門



2025年度 近畿ESDコンソーシアム
成果発表会・実践交流会

2026年1月11日発行

近畿ESDコンソーシアム
奈良教育大学 ESD・SDGs センター
〒630-8528 奈良市高畑町

